

◇ 本単元で育成する資質・能力

論理的に思考し、文章をより深く読み取る力

◇ 学年 第1学年

◇ 単元名 古文『伊勢物語』『芥川』

◇ 本単元の目標

文章の内容に応じた表現の特色に注意しながら文章に描かれた人物、情景、心情などを読み味わい、自分の考えを深め、書き手の意図を捉えることができる。

時	本単元の主な学習活動	[本単元の特徴]
1・2	<ul style="list-style-type: none"> ・初読時の疑問を列挙し、「知識」「つながり」「広がり」の三つの段階に分類する。 ・内容を把握し、あらすじ、心情、情景、時代背景について整理する。 ・単元の終わりに「タイムスリップして作者にインタビューし、書き手の意図が読者に伝わる記事にまとめる」というパフォーマンス課題に取り組むことを理解する。 	<p>本単元の目標を達成するために、生徒は初読段階での疑問を挙げ、三つの段階に分類する。初読段階での疑問を解決する形で内容を把握した後、パフォーマンス課題の解決に向けた見通しを持つに当たって、解決すべき疑問を再度三つの段階に分類し、テーマに関わる本質を問う疑問を協働的に解決する。</p> <p>物語の後半の記述は作者による執筆か否かについて、自分の立場を明確にした上で作者にインタビューし、書き手の意図の記事にまとめるというパフォーマンス課題に取り組みせ、論理的に思考し、文章をより深く読み取る力を育成する。</p>
3	<ul style="list-style-type: none"> ・パフォーマンス課題の解決に向けた見通しを持つに当たって、解決すべき疑問を列挙し、三つの段階に分類する。 	
4	<ul style="list-style-type: none"> ・前時に整理した疑問を協働的に解決する。 	
5・6	<ul style="list-style-type: none"> ・パフォーマンス課題に取り組む。 ・まとめと振り返りを行う。 	

◇ 本学習の目標

パフォーマンス課題の解決に向けた見通しを持つに当たって、解決すべき疑問を解決し、書き手の意図をインタビュー記事の形式で記述することができる。

◇ 学習の流れ（3～6時間目／全6時間）

学習過程（○教師の発問、●生徒の反応予測）	指導のポイント	評価規準〔観点〕 〔評価方法〕
<p>1 課題を見いだす。 ○パフォーマンス課題の解決に向けた見通しを持つに当たって、解決しておきたい疑問を挙げてみよう。 ・各自で三つの段階に分類した疑問をグループで共有する。</p> <p>2 課題を設定する。 ○パフォーマンス課題の解決に向けた見通しを持つに当たって、どの疑問を解決すべきだろうか。また、解決のためにはどうしたらよだろうか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・なるべく多くの疑問を挙げさせた上で、自分たちで解決できるものと、パフォーマンス課題に取り組むために重要な鍵を握っていると考えられるものとし、分類させる。 ・疑問の解決は作者の意図を理解するために行うことを確認し、疑問点の中からパフォーマンス課題の解決に向けた見通しを持つに当たって、重要な疑問は何かを問いかける。 	<p>文章に描かれた人物、情景、心情などを読み味わい、自分の考えを深め、書き手の意図を記述している。 〔読む能力〕 （パフォーマンス課題）</p>
<p>【設定した課題】 『露』と答えた時に消えてしまいたかった」という気持ちの解釈は、和歌より後ろの事実説明の記述がある場合とない場合とでどのように変わるか。</p>		
<p>3 課題解決を行う。 ○女を盗み出し、女が鬼に食べられ、歌を詠むまでの記述のみの場合と、後半の事実説明の記述が付け加わった場合とを比較してみよう。 ●前半の記述は恋物語がミステリアスに描かれていると読み取れるのに対して、後半の記述が付け加わることで政治的事件として読み取れる。</p>	<p>【発問の意図】 後半の事実説明の記述がある場合とない場合とをグループで比較させ、共通点と相違点を挙げさせる。後半の記述の有無によって、文学としてどのような違いが生じるか、考察させる。</p>	
<p>4 自分の考え（解決策）を表現する。 ●後半の記述があることで、「消えなましもの」という表現は、単に自分の恋心が成就しなかったことを描くのみならず、政治的に失脚したことを含意するようになる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全体へ発表させ、意見交換を行わせる。 	
<p>5 解決策を踏まえ、パフォーマンス課題に取り組む。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・一定の共通理解を図った上で、パフォーマンス課題に取り組ませる。 	
<p>【パフォーマンス課題】 タイムスリップして「芥川」の作者にインタビューし、書き手の意図が読者に伝わる記事にまとめなさい。</p>		
<p>6 振り返りを行う。 初読段階と2回目の疑問を比較する。 パフォーマンス課題を自己評価する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・各自で考えた質問を作者に問いかけ、作者になりきって自分で答えるインタビュー形式で記事を書かせる。 	

【実践結果】生徒の変容

1 生徒の挙げた疑問について

生徒の挙げた疑問が、次のようにより深い疑問へと変化した。

	第1時	第3時
分かるもの【調べれば】 (知識)	<ul style="list-style-type: none"> ・妻にできそうにないのはなぜか。 ・どうやって盗み出したのか。 ・どこへ行こうとしたのか。 ・芥川という川は今でもあるのか。 ・芥川はどこにあるのか。 	
違う? など【なぜ? どう?】 (つながり)	<ul style="list-style-type: none"> ・女は男のことをどう思っていたのか。 ・なぜ遠いところまでわざわざ連れていったのか。 ・「これは何ですか」と尋ねられたあと、どうして男は答えなかったのか。 ・なぜ戸口にいて女の人と一緒にいなかったのか。 ・なぜ鬼にたとえたのか。 ・なぜ「露」と答えた時に消えてしまったかったのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・芥川の場所をどの説に従って設定し、ストーリーに生かすか。 ・なぜ男は求婚し続けたのか。 ・女は男のことをどう思っていたのか。 ・なぜ鬼に食べられたという設定にしたのか。
本質を問うもの【テーマに関わる】 (広がり)	<ul style="list-style-type: none"> ・最後の歌に込められた思いは。 ・作り話なのか、本当の話なのか。 ・この作品は何が言いたいのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「露」と答えた時に消えてしまったかったという気持ちの解釈は、和歌より後ろの部分があるのとないのとでどのように変わるか。 ・どこまでが本当の話なのか。 ・どうして自分に不利になる話なのに題材にしたのか。 ・どうして「消えなましものを」と言いながら死や出家を選択せずに生き続けたのか。

2 課題解決の達成状況

次のパフォーマンス課題について、生徒は次のとおり、インタビューの質問と回答の例を作成した。

【パフォーマンス課題】

平安時代の京の町で、偶然あなたは、「芥川」の主人公であり、作者である在原業平に出会いました。そこで、「芥川」の執筆についてインタビューし、書き手の意図が読者に伝わる記事にまとめなさい。

【インタビューの質問と回答の例】

- ・なぜ「鬼」にたとえたのですか。→自分の力だけでは抗えないものだからです。人は鬼に勝てない。
- ・不思議な点があるのですが……。→実は「芥川」は全てが実話ではないのです。読者が物語だと分かるようにわざと現実ではありえない内容を入れました。
- ・なぜ、わざわざ「鬼」として書いたのですか。→女性も連れ戻した彼女の兄も位が高くなったので、実名で悪者として書くと、私が罰せられるかもしれないのです。だから、現実と変えて彼女への思いを綴りました。彼女は当時、帝の后になることが決まっていました。私達の恋は許されなかったのです。

3 振り返りにおける生徒の気付き

振り返りにおけるワークシートへの生徒の記述や発言から、次の2点が成果として挙げられる。

生徒自らが疑問を挙げ、解決していくことによって、何が作品解釈の核心になるかということを生徒自身が自覚し、前半と後半の文章の関係性に着目することで、和歌に吐露された作者の思いや生き方そのものについての考察を行い、作品の本質に迫ることができた。

生徒自身が疑問を相互に関連付けて組み立て、解決していくという課題解決力が養われた。また、疑問の整理を二回行うことで、表現面にも着目し、文章表現・内容と書き手の意図との関係性を生徒自身が見いだすことができた。さらに、主体的に作品解釈に関与し、意欲の向上も図ることができた。

【改善の方向性】

この実践の工夫点として、疑問を挙げる場面を、初読時とパフォーマンス課題に取り組む前との二回設定していることが挙げられる。二回目の疑問を挙げる場面においては、生徒は読みの深化を意識することができ、その段階で疑問を挙げることは、意欲の喚起とともに、生徒が自分自身をより深い読みへと導くことを可能にする。文章の本質へと迫る疑問を挙げさせ、生徒自身に課題設定・解決のプロセスを認識させる教師の効果的な働きかけが重要となる。

振り返りの場面において、パフォーマンス課題の記述を自己評価させる際のループリックについては、生徒の実態に合わせ、より良いものへと不断に改善していくことが必要である。